とあるチートオリ主の原作介入

闇符

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とあるチートオリ主の原作介入

【Ｎコード】
Ｎ１５０７Ｋ

【作者名】
闇符

【あらすじ】
神に殺されて死んだオタクなオリ主が神からもらったチートを駆使して原作介入。最強系オリ主、ハーレムになるかはわかりません。最強系が嫌いな人は、気分を害されるかもしれません。

ステータス　ｆａｔｅ基準

十六夜悠二　　１６歳

容姿　あかね色に染まる坂の長瀬準一。黒いコートに黒いズボンと全身真っ黒。

性格　優しいが基本自分一番で愉快犯。

身長　１８４ｃｍ

体重　６９ｋｍ

ステータス

属性　混沌・中庸

筋力　Ａ＋＋　魔力　ＥＸ

耐久　Ａ＋＋　幸運　ＥＸ

敏捷　Ａ＋＋　宝具　ＥＸ

対魔力　Ａ

A以下の魔術は全てキャンセル。事実上、現代の魔術師ではセイバーに傷をつけられない

騎乗　EX

騎乗の才能。馬から幻獣・神獣のものまで乗りこなせる。実質乗りこなせないものは無い。

保有スキル

何でもできる程度の能力　EX（偽）

何でもできる。蘇生などは、制限が掛かっている。本当の能力名がわからなく自称している。

ありとあらゆるものを使いこなす程度の能力　EX（偽）

ありとあらゆるものを誰よりもうまく使いこなしてしまう。それはすでに無意識で出てしまうレベル。この能力名もわからなく主人公が自称している。

厨二病　Ａ

オリ主がチートオリ主足りえるためのスキルで才能であり、高ければ高いほどチートオリ主としての補正度が高くなる。最高レベルのランクであり、もはや呪いである。

宝具

創造する万物創造（クリエイション）　ＥＸ

鉛筆から地球破壊爆弾まで、宝具なら、Ｅ　～　ＥＸランクのまでありとあらゆるものを創造する。

付加する万物能力（エンチャント）　ＥＸ

ありとあらゆる物にありとあらゆる能力を付加する事ができる。

プロローグ（前書き）

これが、処女作なのでご指摘とご鞭撻のほどおねがいします。

プロローグ

――――？？？

「おい！おきるんじゃ！」

「……う…ん？」

俺は、聞いたことない声で気が付いた。こえのしたほうへ勢い良く顔を向けたらそこには、なにやら白い法衣の様なものを来た白髪の爺さんがいた。

「ああ、やっと起きたか起きないから心配したぞい」

爺さんは、起きたのを確認して息をついた。

「おまえ、誰？まさかこの展開」

「気がついておったか、そうじゃわたしは、神様じゃ！」

「やっぱりそうなのか！？」

いやしかし、ただのボケた爺かもしれん。

「ぼけとらんわぁ！本物の神じゃ」

「人の心読んでんじゃねーよ。てかなんで読めんの？」

マジかよ、本当に神様なのか？

「だからいったじゃろう。わしは神様じゃと」

「だから、心読むんじゃねぇよ」

「わかった。それで、話を進めるぞ。なぜ、お主をここに連れてきたかというと死んでしまったからじゃ・・わしのせいで」

「おいおい、何で死んだんだ俺。てかお前が殺したのかよ責任取れよ」

「すまん、それで生き返らせようと思うのだが元の世界じゃまずいのじゃ」

申し訳なさそうに言う神様に俺は言った。

「まぁ生き返ったりしたらまずいしな。べつに未練もないしな」

「そ、そうかそれでどこが良いのじゃ？」

まさかこの展開は、チートオリ主系か？

「まぁオタクとしては、ゼロ魔の世界かな」

そう、何を隠そう俺は、オタクなのだ。しかもゼロ魔のタバサとか幼女も大好きだ。

「そうか、それとおまけに願いをかなえてやろう。チートでも良い

ぞ」

ふ、決まりだな。原作をこわすぜ！

「そうかそれなら、まず1つめ、最強の肉体がほしい」

「最強の肉体？」

「具体的に言うと、不老不死に天才の頭脳、それから魔法やら気やらの最大量が無限で」

「最初からチートじゃのう」

「2つめ、アニメのありとあらゆる技、魔術、魔法が使えるようにすること。条件のあるやつもなしで使えるように。もちろん、固有能力も魔眼とかな」

「わかった」

「最後は、創造能力かな」

「わかった。では・・・「まってくれ！」・・なんだ？」

「俺が才人の変わりにじゃなくて一緒に召喚されるようにしてくれ」

「わかった。では、行くぞ！」

足元に急に穴ができ、落ちていった。

「下からっ！？テンプレすぎだ！うわぁ～～～！！くそ爺！覚えと

けよぉ〜！！」

こうして、チートオリ主の原作介入が始まる。

プロローグ（後書き）

あ、主人公の名前考えてなかった。

第一話　俺、最強？（前書き）

これ結構、時間がかかりますね。
文才と速才が欲し～

第一話　俺、最強？

「あんたたち誰？」

鏡を抜けるとそこにはツンデレ黄金対比９：１を持つという少女、ルイズがいた。横には、仰向けに寝ているハーレム野郎平賀才人がいる。いつまでも黙ったままだとルイズが騒ぎそうなので名乗っておく。

「俺は、十六夜悠二」

これが一番無難だろ。俺が、自己紹介をし終えたので才人に視線を送る。きずいたのか才人も自己紹介をする。

「・・あぁ俺は、平賀才人だ」

「あんたたちどこの平民？」

なんかいらっと来るね。それにしてもまわりもうるさいな誰かが「平民呼び出してどうするの？」とか「さすがゼロのルイズ」とか言っている。ルイズがああなるのもわかる気がする。それにしてもタバサは、チラチラこちらを見てるな。オリ主補正を見せてやる「にこっ」タバサは、「・・・＼＼＼」顔を少し赤くした。ほんとかわいいな。

「ミスタ・コルベール！」

ルイズが怒鳴り人垣が割れる。出てきたのは、中年の男性ハゲことコルベールはげてるねと思いながら何を話しているか聞いてみる。

ほんとは、聞かなくても良いんだけどね。

「なんだね？ミス・ヴァリエール」

「あの！もう1かい召喚させてください！」

「それはだめだ。ミス・ヴァリエール」

「どうしてですか？」

この後は長いので割合する。
そのあとルイズがやってきて、

「あんたたち、感謝しなさいよね。貴族にこんなことされるなんて、普通は一生ないんだから」

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。
五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ」

といって才人にキスをする。俺は、やりたくないのでルーンをコピーする。
相当痛いな、才人？横で騒いでるよ。するとコルベールが来て、

「コントラクト・サーヴァントはうまくいったみたいですね」

「ふむ・・・めずらしいルーンだな」

嬉しそうにそう言ってコルベールが俺の手の甲のルーンをスケッチする。五分チョイで終わった。

「みんな教室に戻るぞ」

コルベールがそういうとみんないっせいに飛ぶ。後ろから、「飛んでる！？」とかの声が聞こえる。

俺は、いきなりだったらむっちゃ驚くだろうな、と思いつつ平然としている。

このあと、才人が「ルイズは、飛ばないの？　」と言いルイズを怒らせていた。結局、まだ俺のチート能力知られるわけにはいかないので俺たちは、徒歩で帰った。

「別の世界って、どういうこと？」

「月が一つで、魔法使いがいない世界ですよ」

「あんた馬鹿にしてんの？貴族様馬鹿にしてんの？ねぇ？」

「俺たちは、異世界から来たんだって才人ほら証拠」

「え？ああ、わかった」

帰ってきた後、俺は才人と一緒に説明していた。

「すごく綺麗・・・何系統の魔法なの？」

「「魔法じゃない、科学だ」」

「だからカガクって何よ！」

「とにかく魔法じゃないんだ」

「ふん！まあいいわ。あんたたちが異世界人だろうが、私と契約したからには、あんたは私の使い魔。不本意だけどね」

「使い魔は、主人の目となり、耳となる能力。あるいは、秘薬と言った魔法の触媒になるものを探すこ

と。そして、一番大事なのが、ご主人様を守ること。使い魔は、その能力を持って、敵から必ずご主人

様を守るの。でもダメね、あんたにはどれも期待出来そうにないわ」

「はっ！俺に勝てるやつはいねぇ。後で証明してやるよ 」

なんたってこっちには神様からのチートがある。

「俺だって護るぐらいならできるぜ」

才人も言う。

「まぁいいわ、今日はもう寝る」
そう呆れたように言うと、目の前で着替え始め下着姿になるルイズ。
無言で立ち上がってドアを開ける。才人も無言でついてくる。
「あんたたちどこ行くのよ？」
「健全な男子にとって女の子の肌は目に毒なのだよ。なあ才人？」
「その通り」
二人は、廊下に出て行った。

「なぁ、十六夜おれらって戻れるのかな？」
才人が聞いてくる。
「わからん、でも戻れるかじゃなくて戻るんだろ？」
「ああ、そうだよな！」
チートな俺ならいつでも戻せるけどね。まあ、才人もやる気が出てきたみたいでよかった。

才人とルイズ寝しずっまたころ、広場にひとつ人影があった。

「さぁて、チートの性能を見てみますか封絶っ！！」

悠二を中心に半径1キロメートルのドーム状の陽炎の結界が発動するその色は漆黒の黒。

「えっ！？おいおいなんで黒なんだよ、どこの盟主さまですか？」

「まあいいや、サギタマギカ？セリエス？オブスクーリー（闇の29矢）！！」

ドガガガガン！！

「詠唱破棄で地面にクレーターができるとは恐るべしチート」

「次っ！Ｉ　ａｍ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ．　体は剣で出来ている。

Ｓｔｅｅｌｉｓ　ｍｙ　ｂｏｄｙ，　ａｎｄ　ｆｉｒｅｉｓ　ｍｙ　ｂｌｏｏｄ血潮は鉄で、心は硝子。

Ｉ　ｈａｖｅ　ｃｒｅａｔｅｄ　ｏｖｅｒ　ａ　ｔｈｏｕｓａｎｄ　ｂｌａｄｅｓ．　幾たびの戦場を越えて不敗。

Ｕｎｋｎｏｗｎ　ｔｏ　Ｄｅａｔｈ．　ただ一度の敗走もなく、Ｎｏｒ　ｋｎｏｗｎ　ｔｏ　Ｌｉｆｅ．　ただ一度の理解もされない。

Ｈａｖｅ　ｗｉｔｈｓｔｏｏｄ　ｐａｉｎ　ｔｏ　ｃｒｅａｔｅ　ｍａｎｙ　ｗｅａｐｏｎｓ．　彼の者は常に独り　剣の丘で勝利に酔う。

Ｙｅｔ，　ｔｈｏｓｅ　ｈａｎｄｓ　ｗｉｌｌ　ｎｅｖｅｒ　ｈｏｌｄ　ａｎｙｔｈｉｎｇ．　故に、生涯に意味はなく。

Ｓｏ　ａｓ　Ｉ　ｐｒａｙ，　ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ　ｂｌａｄｅｗｏｒｋｓ．　その体は、きっと剣で出来ていた。

心情世界が現実世界を侵食する

「うおーかっけー！これぞ男のロマンだ！！」

一番近くにあった名のない名剣を持ちながら

「ガンダールヴの力を体験しますか・・・お、結構便利だな。まぁ、無限の剣製で強化と解析があるからルーンは、いらないな」

「ギーシュ戦に備えてどんなネタがいいか考えておくか。才人もルイズも驚くだろうな」

こうして、1日が終わる

第一話　俺、最強？（後書き）

やっと主人公の名前が決まった。
主人公には、ほかの世界にもいかせたいです

第二話　俺と才人とチート（前書き）

自分的には、がんばってるんですけどぜんぜんだめなんですよねー。

末永くよろしくお願いします。m（＿＿）m

第二話　俺と才人とチート

「知らない天井だ。」

これは言わなくちゃね！ルイズは……。まだ起きそうにないな。つか、まだ日が出たばっかか。ルイズは七時ごろに起こすとして、さっさと才人を起こしますか。

「才人、起きろ」

「・・・・」

「才人、起きろって」

「・ん・・なんだ。えっと・・「悠二だ」そうだった。じゃあ、夢じゃないのか」

才人がうつむいて顔を歪める。

「まぁ、落ち込んでないでどうにかするしかないだろ。それに少し話がある」

なんとなくわかるけどね。事前にわかってたから良いけど、知らなかったら発狂ものだからな。

「ごめん、それで話ってのは何だ？」

「ここじゃ話せないし、少し移動するぞ」

「わかった」

青年達移動中・・・・

「それで話、ってのは何なんだ？」

はなしは、ぶっちゃけ能力関係の話だ。才人にガンダールヴの事を話そうと思う。

「そうだな話は、これについてだ（ぱちんっ）」

俺は、指をならし認識阻害の結界が発動させる。

「うわっ！なんだこれ、なにやったんだ？」

才人は、驚きながらきいてくる。

「今からする話は、聞かれたくないからな。これは認識阻害の結界で、簡単言うと外にいる人には、認識できなくなる魔法だな。」

「えっ、ま、魔法使えんの！？」

「使えるぞ。神から貰ったギフトでな」

「うわっ、ずりぃ。なんてチート」

「自分でもそう思うよ。それで話は、そのルーンについてだ」

「こ、これの事か？」

才人は、左手のルーンを指差した。

「そう、そのルーンには、チート級な能力があるんだ」

「どんなのうりょくがあるんだ！？」

それを聞いて才人は目を輝かせながら聞いてくる。

「武器を持つと、身体能力があがって、その武器の使い方がわかる。はっきり言って、某錬鉄の英霊の強化と解析だな」

「マジかよ、それって最強じゃね？」

「ほらこれで試してみろ」

剣を一本創って才人になげる。

「うわっ！あぶねぇ（ぱしっ）・・すげぇ体がめちゃくちゃ軽い、使い方も頭に流れてくる」

才人は、動き回りながら剣を振っている。

「ちなみに俺は、某錬鉄の英霊の能力自体使えるけどな」

「やっぱり、おまえは、チート野郎だなっ！！」

才人が切れて斬りかかって来た。

え？このあと？才人にＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩをしました。正当防衛だよね？

第二話　俺と才人とチート（後書き）

うわー文字数ぜんぜん足りねえ。
どうしよ。

第三話　主人公は～タバサと～であった～（ウルルン風）（前書き）

しばらくぶりです。
ある程度原作に沿っていきますがよろしくお願いします。
口調が変わってるかも。

第三話　主人公は～タバサと～であった～（ウルルン風）

「俺と才人は、部屋に帰ってきますた」

「えっ、誰に言ってんの？」

才人が大丈夫かと聞いてくる。

「ああ、才人は気にするな。それよりもルイズを起こすぞ。お前は下着を洗って来い」

「え～めんどk「行って来い」・・わかったよ」

才人は下着を抱えて出て行った

「じゃあそろそろおい、ルイズ起きろ」

「・・ん・・・・何？」

あれ、ルイズって朝こんなかんじだっけ？まあいいや。

「ああ、起きたかルイz「あんた誰よっ！」昨日召喚しただろう？」

「そうだったわ。何でこんなの召喚しちゃたんだろう。は～」

ルイズ落ち込んでるわ～。まあ、こっちから来てるんだしこれぐら

いはいいか

「それよりももうひt「（バン！）おい、おわったぞ」・・まあいいわ。それよりも服」

「ほらっ。これで良いだろ？」

才人は、椅子に掛かっているのをつかんで渡す。

「下着とって。クローゼット一番下」

省略

やっぱりああ言うのって強制いべんとなのか？俺空気になってたしな。恐るべし世界の修正力！

別に、空気なったからって省略してないんだからね！！

「つい、ツンデレになっちまったぜ」

ちなみに、ルイズとキュルケいま一触触発状態です。ええあの場面です。

「あなたの使い魔ってそれ？」

むかつくわ～。そう言えば最初こんな感じだったか？怖いので自分に認識阻害をかけてます。

「そうよ」

「あっはっは！本当に平民を呼び出しちゃったのね！さすがはゼロのルイズ！」

「うるさいわね」

「どうせ使い魔にするならこう言うのがいいわねフレイム～」

のそのそとフレイムといわれたものが出てくる。

「うわっ！真っ赤な何か！」

才人がしりもちをつく。ぷっ、やべもう無理

「・ぷっ・・あっはっはっは笑える。「うわっ！真っ赤な何か！」はないだろ～・・・あれどうしたの？」

みんな、呆然とこっち見てる。まあ、いきなり出てきたらびっくりするよな。

「それより、俺は十六夜悠二だ。それとそこに座ってるのは才人だ。さっさと起きろ」

「ああ、おれは、平賀才人よろしく」

急いで起き自己紹介をする

「よろしくそれよりさっきの何？いきなり出てきたように見えたのだけど」

「そうだよいきなり出てくるなんて何やったんだよ」

「企業秘密だ。ヒントは最初からここにいただ」

「あれか、でもいきなりは気よ付けてくれびびった」

才人は、気ずいたかこの前見せたしな。

「それにしても良いサラマンダーだな」

「わかる？フレイムは火竜山脈のサラマンダーよ。私の二つ名『微熱』にぴったりだわ」

「そうだｎ「さっきから無視しないで！」」

「先に行ってるわ」

キュルケは、颯爽と去っていった。

「もうなんなのよ、あの女ー！！早く行くわよ！」

「あ～俺はほかの使い魔も見たいから使い魔のところに行ってくる」

そう俺はシルフィードに会いに行くからな！

「まあいいわ、サイトいくわよ」

「ああ、じゃあまたな」

じゃあ、いきますか。

青年移動中

「シルフィード見っけ」
ふっふっふこれでタバサと会える。
「きゅい、きゅい～」
「かわいいな～マジ癒されるわ～♪」
シルフィードを撫でまくる。撫でて癒されまくっているとふいに背後から声がかかった。
「誰？」
タバサキター！猪口　有佳さんですね分かります。
「ああ、俺は十六夜悠二ルイズの使い魔その２だよ」
「違う、あなたは何者？みんなと違う違和感がある」
うわ～すごいよ。勘鋭すぎだよ。
「それはまた今度教えてあげるよ。それよりシルｆ・・げふん、げふんこの風竜キミの使い魔？」
知ってるんだけどね。やべー名前教えてもらってなかった。
「そう、シルフィード」

「シルフィードって言うの？よろしくシルフィード」

「きゅいきゅい～♪」

「そろそろ時間だ」

「また」

「きゅい～」

タバサたちに別れを告げ、その場を去った。

「シルフィード」

「なんなのね？お姉さま？」

「彼は何者？」

「わからないのね。でも私たちより強いのね」

第三話　主人公は～タバサと～であった～（ウルルン風）（後書き）

はい、タバサと戦闘フラグが立ちました。
ギーシュとの決闘の前に入れるつもりです。

第四話　赤土が口に入ってる姿は実写だと気持ち悪い（前書き）

お久しぶりです。５０００文字ぐらいしか書いてないのにお気に入り登録してくれるひとがいてうれしいです。これからもよろしくお願いします。

第四話　赤土が口に入ってる姿は実写だと気持ち悪い

「皆さん。春の使い魔召喚は、大成功のようですわね。
私はこうやって春の新学期に、様々な使い魔たちを見るのがとても楽しみなのですよ」

シュヴルーズは満足そうに辺りを見回して、俺たちを目に留める

「おや？変わった使い魔たちを召喚したものですね。ミス・ヴァリエール」

シュヴルーズが、俺たちを見てすっとぼけた声で言う。
すると、教室中がどっと笑いに包まれた。

「ゼロのルイズ！召喚できないからって、その辺歩いてた平民を連れてくるなよ！」

ルイズは立ち上がった。顔を真っ赤にして怒鳴る。

「違うわ！きちんと召喚したもの！コイツらが勝手に来ちゃったのよ！」

「嘘つくな！『サモン・サーヴァント』ができなかったんだろう？」

ゲラゲラと教室中の生徒が笑う。

「ミセス・シュヴルーズ！侮辱されました！かぜっぴきのマリコルヌが私を侮辱したわ！」

「かぜっぴきだと？俺は風上のマリコルヌだ！風邪なんか引いてないぞ！」

「あんたのガラガラ声は、まるで風邪も引いてるみたいじゃない！」

・・・こいつら授業中だってこと忘れてやしないか？

「お友達をゼロだのかぜっぴきだのと呼んではいけません！」

「ミセス・シュヴルーズ。僕のかぜっぴきはただの中傷ですが、ルイズのゼロは事実です」

数人の生徒が笑ったが、すぐにおさまった。
赤土が飛んできてその生徒の口をふさいだからだ。
実際に見ると気持ち悪いな。
それから少ししてシュヴルーズが現実への帰還をし授業を始めることになった。
シュヴルーズの講義は続き、ルイズが錬金の実技をすることとなったのだが・・・、

「先生、やめておいた方がいいと思います」

キュルケがシュヴルーズに言う。

「どうしてですか？」

シュヴルーズはキュルケの言葉の意図がわからなかったらしく、キュルケに聞きなおす。

「危険です」

きっぱりとキュルケは言った。その言葉に教室にいる全員が頷いた。

「危険？どうしてですか？」

今だ理解できてないらしいシュヴルーズ。ちなみに、俺もわからない。今日の朝に簡単な魔法をタバサから聞いたのだが、錬金はさほど危険ではないはずだ。それなのに何故？

しかし、ルイズはその言葉を聞いて、キュッ、と唇を噛み、

「やります」

そう一言言って前に出て行く。その様子を顔面蒼白の様子で見つめる教室にいる生徒。

サイトは、意味がわからず聞いてきた。

「危険」

タバサが言う。

「なあ、悠二なにがきけんなんだ？」

「わからん。ひとまず、こっちよっとけ」

「？よくわからんけど危険なのはわかった」

「タバサもこっちに来い」

「わかった」

そういっているとタイミングよくルイズが錬金を使う。

「錬金」

どかん。

「プロテクション」

薄い膜状のものが出て爆風を止める

「だいじょうぶだったか？二人とも」

「たすかったぜ悠二。あいかわらずチートだよな」

「平気」

うんうんタバサに怪我がなくてよかったよ。サイトは特にない。

「おい！オレの扱いひど過ぎ！」

「おいおい地の部分に突っ込むなよ」

「タバサもさっきの含めて説明するから・・まあ今日の夜広場でまちあわせな」

タバサだけ聞こえるようにそっと話す。

「わかった」

第四話　赤土が口に入ってる姿は実写だと気持ち悪い（後書き）

ちなみにいまから高校です。

第五話　才人が決闘（前書き）

長くしたため今回ひどい駄文が余計ひどくなってます
それでもいい方なら呼んでください。

第五話　才人が決闘

「これおとしたぞ」

「しらないな。ほかの誰かのじゃないか？」

「お前が落としたんだろ」

サイトがギーシュ（薔薇を持ったキザ野郎）の懐から落ちた香水のビンを拾ったところだ。

で、この後に・・・

「おいギーシュ！それはモンモランシーの香水じゃないか！お前彼女と付き合っているのか！？」

男子生徒Ａが大声で言う。

「それは違う！いいか、彼女の名誉のために言っておくが・・・」

ギーシュが反論するが、少し離れた席から一人の女の子がやってきて・・・

「ギーシュ様・・・やはりモンモランシー様と・・・」

「違うんだケティ、僕の心に住んでいるのは君だけ「嘘つき！」へブッ！」

強烈なビンタをくらい、頬を赤くするギーシュ。そして見事な巻き髪の女の子が現れ・・・

「やっぱり手を出してたのね」

頭からワインをかけられてびしょぬれになったギーシュにサイトが

「水も滴るいい男ってか？」

ギーシュの顔が赤くなる。

「知らないフリをしたじゃないか。話を合わせるぐらいの機転があってもよいだろう？」

俺もそろそろでていくか。

「なにを言ってるんだお前は、冗談は存在だけにしておけ。サイトもなんか行っておけ」

「悠二かそうだな。冗談がすぎるぞキザ野郎」

「なッ！なんだとッ！君は貴族にそんなことを言っていいと思っているのか！？」

「あいにく俺たちは関係ない」

「ふん……。ああ、君は……」

「確か、あのゼロのルイズが呼び出した平民だったな。よかろう。君たちに礼儀を教えてやろう。ちょうどいい腹ごなしだ」

「上等だ。受けてたつ」

「俺もかまわん」

「ヴェストリの広場で待っている。準備ができたら、来たまえ」

ギーシュが友人たちを伴って、出ていった。
一人は残った。僕を逃がさない為だろう。
シエスタは震えながら、こっちを見ている。

「シエスタ。大丈夫だったか？」

「あ、あなたたち、殺されちゃう……。貴族を本気で怒らせたら……」

それだけ言うと、シエスタは走って逃げてしまう。
今度は、後ろからルイズがやって来た。

「あんたたち！何してんのよ！見てたわよ！なに勝手に決闘なんか約束してんのよ！」

「別にどうでもいいだろ？いちいち五月蠅いぞ。それにかつ見込みもある」

「はぁ！？貴族に勝てるわけないじゃない！」

「おいそこの、ひろばはどこだ？」

そこにいた人に場所を聞き、

「おいサイト、いくぞ！」

「ああ、わかった」

「ああもう！ほんとに！使い魔のくせに勝手なことばっかりするんだから！」

ルイズもヴェストリの広場に向かった。

「逃げずにここに来たたことはほめてやる。今からでもないて謝れば許してやる」

そういうのが敗北フラグってきずかないんだ？ほんとめいじわばかばっかりだな。

もちろん、違うのもいるよ。特にタバサとかタバサとかタバＳ・・・

「もう俺めんどいし、ほらサイトなんか言ってやれ」

もう正直めんどいぱっぱと終わらせたい

「そんなことするわけないだろ」

「なら諸君！決闘だ！」

ギーシュは相変わらず、キザったらしい動作をしている。正直言って、かなりウザい。というか、イタイ。

「とりあえず、逃げずに来たことは、褒めてやろうじゃないか」

「そんな口上はどうでもいいから」

「では始めるか」

ギーシュは薔薇を振った。花びらが一枚宙を舞い。

甲冑を着た女戦士の形になった。

「僕はメイジだ。だから魔法で戦う。教えてやろう。僕の二つ名は『青銅』のギーシュだ。従って、青銅のゴーレム『ワルキューレ』がお相手するよ」

「ギーシュ！」

ルイズが怒鳴り込んできた。

「いい加減にして！大体ねえ、決闘は禁止じゃない！」

「禁止されているのは、貴族同士の決闘のみだよ。平民と貴族の間での決闘なんか、誰も禁止していない」

「そ、それは、そんなこと今までなかったから……」

「ルイズ、君はそこの平民が好きなのかい？」

ルイズの顔が朱に染まる。

「誰がよ！やめてよね！自分の使い魔が、みすみす怪我するのを、黙って見ていられるわけないじゃない！それに悠二も止めなさい！」

「平気だから大丈夫だ。少しは黙って見てろ」

これだから魔法至上主義の貴族は、

「おいサイトこれやるからとっとと行って来い」

サイトに干渉莫耶と短剣を投影し渡す。

「本当！これ使っていいのか？」

干渉莫耶を受け取りめちゃくちゃはしゃぐ。

「いいから早く行ってこい。めんどいから早く終わらせろ」

「わかった。いってくるぜ」

ギーシュが杖である薔薇の造花を振ると、花びらが女戦士の形をした、人形になった

「な、なんだこりゃ！」

「言い忘れたな。僕の二つ名は『青銅』。青銅のギーシュだ。君の相手は青銅のゴーレム『ワルキューレ』が務めるよ。じゃあ、はじめようか」

その頃、学院長室では、コルベールがオスマンに説明していた。春の使い魔召喚の際に、ルイズが平民の少年を呼び出してしまったこと。

そして、その少年と契約したとき、現われたルーンが気になったこと。

それを調べていたら……。

「始祖ブリミルの使い魔『ガンダールヴ』に行き着いた、というわ

けじゃね？」

「そうです！あの少年の左手に刻まれたルーンは、伝説の使い魔『ガンダールヴ』に刻まれていたモノとまったく同じであります！」

「で、君の結論は？」

「あの少年は、『ガンダールヴ』です！これが大事じゃなくて、何なんですか！オールド・オスマン！」

「ふむ……。確かに、ルーンが同じじゃ。ルーンが同じということは、ただの平民だったその少年は、『ガンダールヴ』になった、ということになるんじゃろうな」

「どうしましょう」

「しかし、それだけで、そう決め付けるのは早計かもしれん」

「それもそうですな」

コンコンと、ドアがノックされた。

「誰じゃ？」

扉の向こうから、ロングビルの声が聞こえてきた。

「私です。オールド・オスマン」

「なんじゃ？」

「ヴェストリの広場で、決闘をしている生徒がいるそうです。大騒ぎになっています。止めに入った教師がいましたが、生徒達に邪魔されて、止められないようです」

「まったく、暇をもてあました貴族ほど、性質の悪い生き物はおらんわい。で、誰が暴れておるんだね？」

「一人は、ギーシュ・ド・グラモン」

「あの、グラモンとこのバカ息子か。オヤジも色の道では剛の者じゃったが、息子も輪をかけて女好きじゃ。おおかた女の子の取り合いじゃろう。相手は誰じゃ？」

「……それが、メイジではありません。ミス・ヴァリエールの使い魔の少年たちのようです」

オスマンとコルベールは顔を見合わせた。

「教師たちは、決闘を止めるために眠りの鐘の使用許可を求めております」

「アホか。たかが子供のケンカを止めるのに、秘宝を使ってどうするんじゃ。放っておきなさい」

「わかりました」

ロングビルは去っていった。

「オールド・オスマン」

「うむ」

オスマンは、杖を振った。壁にかかった大きな鏡に、ヴェストリの広場の様子が映し出された。

「しかし、心配ですな。少年が本当にガンダールヴだった場合ギーシュが圧倒的に不利です」

ミスタ・コルベールがオールド・オスマンに言う。

「まあ心配いらんじゃろ。子供のじゃれあいじゃ」

「それにしてももう一人の黒い少年、あれからはみなはきずきませんでしたが契約の時に魔力が感じられました。危険ですよ！」

コルベールが悠二ことを話題に上げる。

「それに・・・！黒い少年が渡した赤と黒の双剣を見てくださいっ！尋常じゃない魔力が込められてますよ！危険です！」

コルベールが声を張り上げオールド・オスマンに示唆する。

「大丈夫じゃ。だっまて見とれ」

言い終わったと同時、ワルキューレが才人に向かって突進。右拳が放たれる

「きかねぇ！おらっ！」

ワルキューレの拳を干渉で防ぎ、漠耶で真っ二つに切る

「ばかな！？ワルキューレは青銅だぞ！まだだ！！まだ終わらん！！」

「「どこのシャ○だよ」」

俺とサイトの声が重なる。つい突っ込んじまったよ。

ワルキューレを5体出す。

「5体とか多すぎだから！」

さすがに同時はきついか・・てあれ？原作では圧勝してたよね？ガンダールヴは確か感情の高揚だかなんだかで強さが変わるって原作でデルフリンガーが言ってたな。サイトはまさかのシ〇アネタで萎えたろうな。まさかそれを見越して？ギーシュ恐ろしい子っ！

「サイト早くしろ」

「いや無理だから方法ないから！」

ワルキューレと切り合いをしながら叫ぶ。

「これで勝ったらルイズが惚れるかもな・・ぼそ」

「！なら・・特攻だ！うおー！」

ルーンの輝きが増してサイトの動きが変わる。

まずサイトは近くにいた2体のワルキューレを切り捨てる

「な、なんだいきなり」

サイトの異変にきずきワルキューレを自分の周りに配置させる。

「無駄ー！！」

掛け声とともに干渉と莫耶を投げ、呟く

「壊れた幻想（ブロークンファンタズム）」

言葉とともにワルキューレに向かっていった干渉と莫耶が爆発しワルキューレとギーシュが吹っ飛び、立ち上がろうとしたギーシュにサイトが短剣を突きつける。

「ま、まいった」

見物していた連中が、何やら騒いでいるがサイトが気にせずこっちに来る

ルイズが駆け寄っていく。

「ほら、言った通り、勝ったぜ！」

「あんた！そんなに強いなんて聞いてないわよ！」

「勝ったからいいだろ」

「そうゆう問題じゃないでしょ！」

「まあ、よくやったサイト」

そう言っているとギーシュが俺のほうを向き、

「くっそこの平民にまけてしまったが君をたおして名誉挽回をしよう」

といいやがった。ふふふ・・

「受けてたとう」

オスマンとコルベールは、『遠見の鏡』で一部始終を見終えると、顔を見合わせた。

「オールド・オスマン」

「うむ」

「あの平民、勝ってしまいましたが……」

「うむ」

「ギーシュは一番レベルの低い『ドット』メイジですが、それでもただの平民に後れをとるとは思えません。そしてあの動き！あんな平民見たことない！やはり彼は『ガンダールヴ』！」

「うむむ……」

「オールド・オスマン。さっそく王室に報告して、指示を仰がないことには……」

「それには及ばん」

「どうしてですか？これは世紀の大発見ですよ！現代に蘇った『ガンダールヴ』！」

「ミスタ・コルベール。『ガンダールヴ』はただの使い魔ではない」

「そのとおりです。始祖ブリミルの用いた『ガンダールヴ』。その姿形は記述がありませんが、主人の呪文詠唱の時間を守るために特化した存在と伝え聞きます」

「そうじゃ。始祖ブリミルは、呪文を唱える時間が長かった……、その強力な呪文ゆえに。知ってのとおり、詠唱時間中のメイジは無力じゃ。そんな無力な間、己の体を守るために始祖ブリミルが用いた使い魔が『ガンダールヴ』じゃ。その強さは……」

その後を、コルベールが興奮した様子で引き継いだ。

「千人もの軍隊を一人で壊滅させるほどの力を持ち、あまつさえ並のメイジではまったく歯が立たなかったとか！」

「で、ミスタ・コルベール」

「はい」

「その少年は、ほんとうにただの人間だったのかね？」

「はい。どこからどう見ても、ただの平民の少年でした。ミス・ヴァリエールが呼び出した際に、念の為『ディテクト・マジック』で確かめたのですが、正真正銘、ただの平民の少年でした」

「そんなただの少年を、現代の『ガンダールヴ』にしたのは、誰なんじゃね？」

「ミス・ヴァリエールですが……」

「彼女は、優秀なメイジなのかね？」

「いえ、というか、むしろ無能というか……」

「さて、その二つが謎じゃ」

「ですね」

「無能なメイジと契約したただの少年が、何故『ガンダールヴ』になったのか。まったく謎じゃ。理由が見えん」

「そうですね……」

「とにかく、王室のボンクラどもに『ガンダールヴ』とその主人を渡すわけにはいくまい。そんなオモチャを与えてしまっては、またぞろ戦でも引き起こすじゃろうて。宮廷で暇をもてあましている連中はまったく、戦が好きじゃからな」

「ははあ。学院長の深謀には恐れ入ります」

「この件は私が預かる。他言は無用じゃ。ミスタ・コルベール」

「わかりました。ん・・ギーシュともう一人少年が決闘をしようとしてますよ学園長！」

「グラモンの馬鹿息子がまたやるっとるか。さすがにまずいぞあの少年は・・・急いで秘宝の眠りの鐘を準備しといてくれ」

「わ、わかりました！」

オスマンがそういうとコルベールがあわてて出て行った。

「ほんとに何者なんじゃ」

一人しかいない校長室でその言葉はとけていった

第五話　才人が決闘（後書き）

やっちゃた。テヘ♪
だって使わせたかったんだもん♪
壊れた幻想最高なんだもん♪

おえぇー自分でやっといて口調がきめ～

第六話　ついに俺も決闘だぜ！（前書き）

はぁ～高校で窃盗があり、被害にあいました。

遅くなりましたが６話をどうぞ。

第六話　ついに俺も決闘だぜ！

「Ｗｈａｔ　ｔｏ　Ｇｅｔ　Ｓｔａｒｔｅｄ（じゃあ、始めようか）」

俺が言うと、ギーシュは

「何を言っているんだ。君はもしかして、降参かい？」

英語は伝わらないようだ。それにしても言うこと、言うことむかつくわ～。

「降参するわけないだろ。始めようぜ」

「きみは貴族というものがわかってないみたいだね。体に教えるとしよう」

「さっきも言ったとうり僕はメイジだ。まほうを使わせてもらうよ」

ギーシュは杖を振り、ゴーレムを3体作る。

「（青銅って色きもいな、別にいいけど。それにしても何を使おうかな。みんな観戦してるし杖は使わなきゃまずいな）」

「じゃあ、やりますか」

俺は、某魔法先生の杖を取り出す。えっ？どこから出したって？ご

都合主義だよ。

「なんだいその杖は！？きみもメイジなのか！？それよりその杖はどこから出したんだい！？」

「別にいいだろ？さっさと始めようぜ！魔法の射手（サギタ・マギカ）！！　光の３矢（セリエス・ルーキス）！」

「ワルキューレ！やれやれどうやら君を侮っていたようだ。多分キミには勝てないだろう。だが僕はギーシュ・ド・グラモン。貴族だ。貴族は逃げない、全力でいかせてもらおう」

杖を振り、ワルキューレを7体つくる。

「その勇気に免じて次で決めよう。防いで見せろ。いくぞ！」

「まずい！ワルキューレ！」

その声を聞き、7体のワルキューレがギーシュを護るように囲む。

「おそい！光の精霊２９柱（ウンデトリーギンタピーリトゥス・ルーキス）！！魔法の射手（サギタ・マギカ）　連弾（セリエス）・光の２９矢（ルーキス）！！」

空中に光の矢が現れギーシュに向かう。

「くっ！」（どどどっ！）

「風の精霊１１人縛鎖（ウンデキム・スピリトゥス・アエリアーレス）となりて（ウィンクルム・ファクティ）　敵を捕まえろ（イニミクム・カプテント）　魔法の射手（サギタ・マギカ）・戒めの風矢（アエール・カプトゥーラエ）！！」

ギーシュを戒めの風矢で捕縛しさらに攻撃する。

「受けてみて、ディバインバスターのバリエーション（ノリ）来れ雷精（ウェニアント・スピーリトゥス）風の精（アエリアーレス・フルグリエンテース）！！　雷を纏いて（クム・フルグラティオーネ）　吹きすさべ（フレット・テンペスタース）　南洋の嵐（アウストリーナ）　雷の暴風（ヨウィス・テンペスタース・フルグリエンス）！！！」

「くっ・・・きいたよ。僕の負けだよ」

「いやよくやったよ（いくら非殺傷設定でも気絶しないなんてな）」

「そういえば、名前を聞いてなかったな。僕はギーシュ・ド・グラモンキミのなまえは？」

「俺は十六夜悠二・・いや、悠二・十六夜だ。騒がしくなってきたようだからまた」

「なんとかなったようじゃの」

学園長がハゲに声をかける。

「ハゲじゃない！！」

「どうしたんじゃ？」

「そうですねなんでもないです。それにしてもさっきの魔法はいったい」

あごに手を置き考える。

「まあ、後で聞けばよい、底まで危険ではないようじゃしの」

現在、広場で待ってます。時間指定忘れてた。女の子を待たせるわけにはいかない
これぞ真のフェミニスト。３時間待ってます。

「おそいなあ～・・きたか」

「約束どうりきた。貴方はいったい何者？」

タバサが現れる。

「俺は異世界人だ地球って所から来た。ちなみにサイトも地球から来たんだ」

別にうそは言ってないぞ。うそは。

「そう、あなたの実力、ためさせてもらうラグーズ・ウォータル・イス・イーサ・ウィンデ……ウィンディ・アイシクル！」

「ちょ！まってあぶないから！と言うかいきなり攻撃とかなんで？おかしすぎだろ」

（どうしてもタバサとの戦闘がさせたかったｂｙ作者）

何本もの槍が飛んでくる。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック魔法の射手（サギタ・マギカ）！！　連弾（セリエス）・光の９矢（ルーキス）！！」

俺は魔法の射手でウィンディ・アイシクルを相殺させる。

「ラグーズ・ウォータル……アイス・ストーム！」

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！来れ雷精（ウェニアント・スピーリトゥス）　風の精（アエリアーレス・フルグリエンテース）！！雷を纏いて（クム・フルグラティオーネ）　吹きすさべ（フレット・テンペスタース）　南洋の嵐（ヨウィス・テンペスタース・フルグリエンス）（アウストリーナ）　雷の暴風！！」

アイス・ストームを雷の暴風で打ち消す。ネギまサイコ～。

「これでいいか？それより聞きたい事があるだろ？シャルロット」

タバサはびくっと肩が振るえ言葉を返す

「なんでしっているの？」

にらんでるよ。まあ俺もいきなり呼ばれたら警戒するか。
「俺は大体の事なら知っているからなこの話より俺が使ったやつが聞きたいだろ？」
「そう、じゃあ決闘のときとさっきの魔法はなに？」
「あれのこと？あれは魔法の射手と雷の暴風だよ・・・そうだなおれのせかいでは神秘は秘匿されているんだ。そこに魔術師・・まあこっち言うメイジな？それとそのほかに魔法使いがいるんだ」
某意思のある世界の設定ですねわかります。
「魔術師？とその魔法使いの違いがわからない」
タバサが聞いてくる。こっちじゃわからないだろうからな。
「そうだな少し説明するか。魔術師は魔術、魔法使いは魔法使う魔術とは、人為的に
神秘・奇蹟を再現する行為で魔力を使って世界にあらかじめ定められているルールを起
動・安定させ、神秘を起こす。基本的には等価交換で万能じゃないんだ。で魔法のほうは
魔術師たちの最終到達目標。魔術とは異なり、実現不可能な出来事を出来るのが魔法かな。
今いる魔法使いは五人しかいないんだ」
「わかった。でもあなたはどっち？」

「俺か？魔法使いにはいるかな大体の事は出来るし知ってるし」
やろうとすれば異世界とかいけるしね。
「なら私に協力して、ただとは言わない」
「報酬はいらない」
そういった瞬間タバサ顔をゆがめ、少し考えた後に決心したように
「なら体でｍ「そういう意味じゃない」え？」
タバサが呆然とする。その顔もいいな・・・て俺はＳじゃねぇーー！！
「だからただで協力する。タバサがどのくらいつらかったか知ってるから」
「本当？」
タバサは上目ずかいをしながら聞いてくる。うぅこれはきつい理性が！
「知ってる。だから無理しないでいい泣きたいときはないていいんだ」
なんとか理性を保ち、くさい台詞をはく。我ながらどの口で言ってんだってはなしだよな。

「お前はいったいどれだけの苦しみを一人で抱えてきた？これからはその必要もない。
お前はもう一人で戦う必要はない。俺もいる。一人じゃないんだ」
一人じゃないその言葉でタバサはおれの胸に顔をうずめ泣き出してしまった。
「うう・・・うぅ・・・・うわあぁ～！！」
そっと頭をなでながら
「気が済むまで、泣いていいんだぞ？」
静かなヴェストリの広場に、一人の少女の鳴き声が音高く響いた。

第六話　ついに俺も決闘だぜ！（後書き）

闇符「どうでした？皆さんすばｒ「なわけないだろ～！」（ぐしゃ）

？？「やりすぎた。おい作者、作者！」

ただの屍のやうｄ「なわけないだろ！」

闇符「悠二お前なにやってんだよ！いきなりすぎだろ！てかありえないおとしただろ！」

悠二「いや～はりきりすぎちゃって。てへ♪」

闇符「きもいからやめろや！」

悠二「いや～始めまして読者の皆さん。みんなのアイドル十六夜悠二です♪」

闇符「いやきもいからやめろや！」

悠二「この横からうるさいびっくり大好きくんはほおっておいてまた今度お会いしましょう」

闇符「やっと反応知ってくれた・・じゃなくてびっくり大好きくんてなに！？」

悠二「まあ、まあ」

闇符「そうだな、ではさよならＳＥＥ　ＹＯＵ　ＡＧＡＩＮ♪」

悠二「SEE YOU AGAIN♪」

第七話　我等の剣（前書き）

私は帰ってきた！

今回はリハビリのため短くなってしまっています。

第七話　我等の剣

「ユージ、あんた昨日どこに行ってたのよ！それに昨日のあの魔法本にも載ってないし教えなさい！」

「昨日用があってな。それに別の世界の魔法だし本には載ってるわけないし、魔法はその世界の人間が使うために創ったんだから基本その世界の人間しか使えない。だから無理だ」

うがー！やばい！なに設定捏造してんだよ俺！くっ！右手がやヴぁい！・・・・・あ・・・ちょ！・・・・・・ヴ！・・・・・・・・ふう、よかったおさまった。

「そんなせっかく見つけたのに・・」

おいおい、あからさまに落ち込むなよ。

「ルイズ、そんな落ち込むなって元気出せよ。」

いいぞサイトそのまま、励ますんだ。

「昨日の見ただろ？オレ結構強いんだぜ魔法が使えなくたって俺が守ってやるよ」

「本当？」

励ますより、告ってどうすんだよ。てか何気にいい感じだし。

「ああ、それより落ち込んでないで早く行こうぜ」

「そうね、サイトとユージ行くわよ」

「はらへったな」

「そうだな、じゃあ、余り物でもいいからもらいに行くか」

はらへって死にそう。何でもいいから食いたい。

「ああ、いくかマジきついしな」

俺たちは食堂のほうにそう言って向かった。

「よく来た「我らの剣」

入った直後にマルトーさんに言われた。

「すいません。なんかたべるものありますか？余り物でもいいので」

腹が減りすぎてマジやばい今なら、某湖の騎士の創作料理でもいける気がする。

「いいぞ「我等の剣」、ほら今回のは貴族たちが食べてるのと一緒だからな」

「ありがとうございます」

さっそく、食べてみる。

「うまい！」

すごいうまいな。あいつら毎日こんなの食ってのよ

「マジ！そんなうまいのか・・・・・・うま！うますぎる！」

「そんな喜んでくれれば作ったかいがあるってもんよ。さあこのワインも飲め「我等の剣」よ」

「いやいや、遠慮します。俺らの国ではお酒は２０からですから、なっユージ？」

「うまうま・・・ん？いいんじゃないか今日ぐらい」

今日ぐらいいいだろ。高校生だったから飲んだ事ないから飲んでみたいし。

「おっ、こっちのはよくわかってるな。ほら」

昼食はサイトにワインを飲ませて終了した。

「うまかったか「我等の剣」よ」

「そういえばさっきからなんで「我等の剣」って読んでるんだおっちゃん」

「そりゃあ、あんたらが貴族をふっとばしてくれたからな。おかげでスカッとしたよ。どこで剣なんか
覚えたんだ？それにそっちもあんなすごい魔法どこで覚えたんだ？」

「知らずに体が動いたんだ」

「ああ、俺は貴族じゃないから死ぬ気で覚えたんだ」

死ぬ気っていうか死んで使えるようになったんだけどな。

「聞いたかお前ら！達人はおごらず努力を惜しまない！」

「「「達人はおごらず努力を惜しまない！」」」

「俺らもおごらず努力だ野郎ども！」

「「「おう！」」」

第七話　我等の剣（後書き）

主人公の影が若干うすい

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1507k/

とあるチートオリ主の原作介入

2010年11月2日09時57分発行